

<紙面直言>

クオリティー紙目指せー「特定多数」の読者を念頭に

これまで4回、紙面づくりへの提言を試みてきたが、本紙の経営面を考えると胸が痛い。本県は首都圏のど真ん中にありながら、いや、それ故に東京を本拠とする全国メディアの圧倒的影響下に置かれ、ローカルメディアが育ちにくい環境にあるからである。スウェーデン並みの人口、韓国並みの経済力、さらには日刊新聞発祥の地という伝統まで持ちながら、県内唯一の本格的な地方紙である本紙の県内シェアは、全国紙のそれに比べ格段に小さい。経営面で重いハンディを背負わされている。

全国的にみれば、いま地方紙がとても元気だ。全国紙に先がけてロシアの極東地区に支局を開いたり、NIES、ECに拠点をつくって東京経由でない地域の国際化に取り組む地方紙が増えてきた。興味深いのは東京からの距離が大きいほど、地方紙が元気なことだ。もちろん「神奈川新聞の場合、部数はあまり問題ではない。県内各地域に根を下ろしているオピニオンリーダーに広く読まれているから部数以上の影響力がある」という意見がある。私もこの意見に近い。部数の点で全国紙の追随を許さない有力地方紙のようになるのは、マスコミの本拠・東京に隣接している以上かなり難しい。

私の経験から言っても、昭和50年に県庁に勤めるまでは、本紙を読んだことがなかった。東京に通勤し、東京志向の生活をしている限り、とくに不便は感じなかった。ところが県政にかかわり出した途端、本紙は不可欠の情報源になった。

このことは、本紙の読者は漠然たる不特定多数ではなく、神奈川という地域社会に深くかかわって生き、働き、思考する人々—広い意味での特定多数者だということを示している。だとすれば、こうした特定多数の人々のニーズにどうこたえるかに、紙面づくりの目標をしぼるべきであろう。その一つの方向はローカルなクオリティー紙になることである。もちろん全ページをそうする必要はないが、数ページ使って県内事情を中心に質の高い情報、分析、評論、オピニオンなどを載せてはどうだろうか。

近県に住むある知人は本紙の愛読者であるが、彼によれば「神奈川の動きには全国の動きを先取りするものが多い。神奈川を見ていると時代の流れが分かる」という。過分な批評とは思いますが、ここに本紙の大切な特色があり、めざすべき方向も示唆されている。

いま神奈川は歴史的な構造変化のただ中にある。日本の工業基地であった京浜工業地帯が日本最大の高度技術複合地域ないし研究開発地域に変ぼうしているのをはじめ、本県は全国に先がけて21世紀への扉をたたき始めている。明治以来の本県のパイオニア機能、苗床機能は新しい次元で重要性を増している。こうした動きを光と影の両面から克明にフォローすることが、クオリティー紙への道につながるはずだ。4月からの紙面刷新に期待する。カナシンよ、頑張れ！